生と死を考える　１

吉永　馨

当会の名称は「ターミナルケアを考える会」ですから、生と死を考えるのは当然です。事実この３０年間、いろいろな角度からそれを学んできました。この問題は、がんの末期患者をサポートしようというだけでなく、人生そのもの、生き方そのものに直結しています。曹洞宗の修証議という経典に「生を明（あき）らめ、死を明らむるは仏家一大の因縁なり」とあるそうです。仏教においても生死の問題は大事な課題なのでしょう。

私はこの会に長く関わり、いろいろ教えて頂きましたので、そこで得た知識を順次述べたいと思いました。もとより浅薄な知識ですから、識者からご叱正を頂きたいと思います。

最初に各国の死に対する民間伝承を見てみたいと思います。これはいわば俗信というべきもので、宗教家や哲学者の言うような深遠

なものではありません。しかし俗信ですからいかにも庶民的で、分かりやすく、普通の人には納得しやすいのです。

古事記にイザナミの命（みこと）の死が記載されています。これがもっとも古い死後に関する文献でしょう。イザナミは沢山の子を産みますが、最後に火の神を産みます。その時、火の神の炎に焼かれて死んでしまいます。

その後、夫のイザナギの命（みこと）はイザナミを懐かしみ、あの世からイザナミを連れ戻そうとあの世の世界に下りて行きます。あの世でイザナミに会い、この世に帰るように勧めますと、イザナミは、既に死後の世界の食べ物を食べてしまったから、もう帰れないと言います。しかしイザナギは諦めず、執拗に帰還を主張します。それでは、着替えて来ますから、その間私の姿を見てはいけませんよと言って別室に姿を隠します。イザナギはどうしても見たくて、そっと覗きます。す

るとイザナミは体中が腐敗し、ウジ虫がうようようとうごめいていました。驚き恐れたイザナギは逃げ出しますが、イザナミは追いかけてきます。その追跡をどうにか逃れて、イザナギはこの世に戻りました・・・。

　この神話は、昔の人の考えを反映していると考えられますから、死後、人はあの世に行く、あの世は地下にある、とされていたのでしょう。死んだ人はそういう地下の国に行くというのが日本人の死後観の原型だったと考えられます。